

## 宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第26話

### ロシア革命とレーニン ロシア

2022年まさかと思っていたが、ロシアのウクライナへの軍事行動が止まらない。子供や女性、高齢者を含む無差別攻撃で多くの市民が亡くなり、TVの画面が伝える街の破壊はすさまじく目を覆う。元凶はロシアのプーチンである。柔道を愛し日本の総理とも親しくかつてはプーチンに親近感さえも覚えたが、画面で見る今は執念深い蛇の様な目つき狂人の様相にみえる。

1988年欧州出張の帰り、ソ連（現ロシア）のレニングラード（現サンクトペテルブルグ）の空港に降り立ち数日滞在の後、夜行列車レッドアロー号でモスクワへ向かい、自由主義社会とは異なる社会主義国を垣間見る機会に恵まれた。

当時はゴルバチョフがトップで鉄のカーテンが少し開きかけた時代であったが、ひどい物不足で食糧、衣服、雑貨など生活必需品のあらゆるものが不足していた。赤の広場にある Gum百貨店は人が溢れていたが商品棚は空であった。

当時の記憶をたどってまず思い浮かぶのは一般市民の忘れられない親切心である。例えば撮影禁止であっても係員は自分の目を手で覆い目が見えないので早く撮れとうながす、長い列に並んだはいが無料かと思っていたら検札で入場料が必要だと判り困っていると、係はくるりと後ろ向きになり手をふって見てないから早く入れと無料で通してくれた。

バスの乗り方が判らずにいると後ろの人が尻を押しバスに押し込みバス券を往復くれたりした。大きな黒パンを買った。包装もなく乱暴に渡された。むき出しのパンを抱え困惑していると身なりの貧しい男に肩をたたかれ擦り切れた上着のポケットからしわくちゃなビニール袋を差し出してくれた。この様な体験を重ねてロシア人の、人の好きをしみじみ感じた旅であった。

レニングラードはロシアの歴史の舞台であり、見どころ満載の素晴らし都市である。日本語の達者な年配の女性ガイドにまず案内されたのは、ロシア革命で重要な役割を果たし、ネバ川に係留されているオーロラ号である。



明治38年東郷元帥率いる日本艦隊とロシアの誇るバルチック艦隊が熾烈な海戦を繰り広げ日本が大勝利した。ロシアはわずか3隻の軍艦がウラジオストックに帰還できた。その1隻がオーロラ号である。因みに日露海戦で現存している船は、日本の東郷平八郎元帥が指揮をとった旗艦三笠とロシアの巡洋艦オーロラ号の2隻だけで三笠は横須賀に係留保存されている。レーニン率いるロシア革命軍はサンクトペテルブルグの宮殿を取り巻いていた。

**ネバ川に係留されているオーロラ号** 宮殿突入の合図はオーロラ号からの空砲である。艦から放たれた号砲を合図に宮殿に突入し、遂に革命軍が勝利をおさめたのである。

レニングラードは心に残る素敵なロシアの古都である。旧名ペトログラードは絶大な権力と富を持つロシア皇帝、ロマノフ朝の本拠地であった。当時食べるものにも事欠く貧窮する民衆の関心をそらすために皇帝は他国への侵略を続けたが、ますます民衆の生活は困窮しデモは繰り返された。

1894年ニコライ2世が即位した。1905年日露戦争中、民衆が生活の困窮と平和を訴えて皇帝の住む冬宮に向かってデモ行進をした。皇軍はデモ隊に対し銃撃で蹴散らそうとして発砲し多くの犠牲者が出た。これが血の日曜日事件である。



血の日曜日の舞台冬宮広場

このようなすさんだ社会環境の中で市民が蜂起しロシア革命が起こり、レニングラードは革命の舞台となったのである。

ロシア革命は2月革命と10月革命がある。2月革命は第1次世界大戦が長引き食糧など生活がひっ迫し、しかも帝政ロシア宮廷に怪僧ラスプーチンが幅を利かせ政務に口を挟むなどしたためもあり、騒然とした世相の中労働者、農民さらに兵士までもが加わりゼネストに突入した。そして1917年3月15日ニコライ2世は退位

し、ここに300年間続いたロマノフ王朝は崩壊したのである。

王朝が終焉を迎えケレンスキーを中心とする臨時政府ができた。また時を同じくしてソビエト（ロシア語で会議・委員会の意）が食糧配布など重要な役割を果たし臨時政府と対立していく。

10月革命は王政を覆して出来た臨時政府だが、国民の期待とは次第に乖離しはじめ、2月にはスイスに亡命していたレーニンが帰国しボルシェヴィキを率い「すべての権力はソビエトへ」のスローガンを掲げた。レーニンは民衆の絶大な支持を受け革命の旗手として立ち上がり、ケレンスキー首相率いる臨時政府とまっこうから対立していく。

両陣営の攻防が続くがレーニンはトロツキー等と共に臨時政府に対し戦いを挑み遂に臨時政府を打倒し、ここに世界初の社会主義革命が成立した。

新しい政府として人民委員会ができレーニンは議長、トロツキーは外務人民委員、民族人民委員はスターリンという顔ぶれであった。

レーニンの率いるボルシェヴィキは共産党と改称し首都をレニングラードからモスクワに移した。共産党は男女同権、選挙権を持たなかった労働者、農民等に選挙権を与えるなど帝政時代と異なる改革を実行していった。レーニンの統率するソ連はウクライナ、白ロシアなど周辺諸国と共にソビエト社会主義共和国連邦（USSR）を成立させ1924年に新憲法を発布した。

モスクワは15世紀末から首都であったが、首都は1812年にレニングラードへ移り、そして革命後1918年3月からモスクワが再び首都となった。

モスクワの赤の広場には頑丈な赤いレンガの高い塀を巡らしたソ連の中枢であるクレムリン（城塞の意）がある。



クレムリン前のレーニン廟



聖ワシリイ寺院



モスクワ赤の広場



クレムリンの厳めしい塀の中へは入れないと思っている人が多いが、1958年からもちろん立ち入り禁止区域はあるものの一般にも開放され自由に誰もが入れようになっていて驚いたものである。訪れた9月中頃はすでに晩秋の趣でクレムリンを取り巻く赤らんだ城壁に黄ばんだ木々の葉のいろどりが美しく映えていた。



時は秋クレムリンの高い塀

クレムリンの内部は美しく広大である。屋根に金色に輝くネギ坊主をいくつも載せた教会の内陣は、イコンで覆われ荘厳な雰囲気である。皇帝の戴冠式もこの教会で厳かにとり行われたのだろうし、ロマノフ朝を手玉に取った怪僧ラスプーチンやレーニン、スターリン、フルシチョフひょっとしたらプーチンさえもこの教会で神に祈ったかも知れない。さらに王冠やダイヤモンドなど展示してある博物館、庭園には巨大な大砲や驚くべき大きな鐘、ナポレオンから奪った砲筒の山、庭園の一角にレーニンの大きな座像などがあり興味

津々の散策ができる。



クレムリン内庭の巨大な鐘



クレムリンの庭のレーニン座像



赤の広場とレーニン廟

モスクワの赤の広場にレーニン廟がある。宿泊しているインツーリストホテルから徒歩10分ほどである。朝7時に散歩がてら赤の広場へ行ってみた。クレムリンの塀際に赤みがかった花崗岩のレーニン廟が聳え、このひな壇にはソ連の首脳たちが立ち並ぶ姿をテレビで目にしている。早朝なのにレーニンの眠る姿を一目見ようとする軍服姿の軍人の列を先頭に人々は赤の広場から溢れ、1000m余の長蛇の列となっていた。没後64年を経てなお人々から慕われているレーニンの人気である。



レーニン廟入り口



早朝レーニン廟詣での軍人



遙か彼方まで続く詣での列

ウラジーミル・レーニン (1870年4月22日~1924年1月21日)

ロシアの革命家ソ連の初代指導者でソ連を建国した。1917年10月革命に勝利し委員会議長に

就いた。

第1次世界大戦後、ロシア経済は低迷し労働者のストライキによってそれまでの帝政ロシアは崩壊し亡命先のスイスから戻ったレーニンによってソビエト政府が樹立される。

レーニンは教育者の子供として現在のウリヤノフスクに生まれ、幼少のころから頭脳明晰で高等学校では全科目首席で卒業した。1887年兄のアレクサンドルがロシア皇帝の暗殺計画に関わったと処刑されるというショッキングな出来事に遭遇する。大学で学生運動に参加し、後にマルクス主義グループを組織する。1893年レニングラードに移る

1905年第1次ロシア革命にリーダーとなるも鎮圧されスイスに亡命する。1917年2月革命のときに、ロシアに戻り革命家として活発な行動をおこし10月革命を成功させ、ロシア帝政を打ち破る。1922年社会主義国家ソビエト連邦を樹立する。1924年脳卒中で倒れ死去享年53歳

(1988年)



モスクワにある巨大な  
マルクス像

革命後のソ連、ロシアの歴代指導者は11名に及ぶが、現在のトップ指導者はプーチンであるが次を担う指導者は平和に徹する指導者であって欲しいものである。参考までに革命から100年、ロシア共産党の指導者の名前を列挙するとレーニン・スターリン・マレンコフ・フルシチョフ・ブレジネフ・アンドロポフ・チェルネンコ・ゴルバチョフ・エリツイン・プーチン・メドベージェフ・プーチン・(?)となる。

余談) 始めてカラー映画(当時総天然色といった)を見たのは小学生の時に先生に引率されてみた「石の花」である。「石の花」はソ連で1946年に製作された。当時の映画は白黒映画が当たり前であった時代である。映画館の大きな画面を食い入るように見つめた。映画を見終わり外へ出て興奮がしばらく収まらなかった。

大手フィルム会社の技術を担っていた先輩に話を聞いた。かつてフィルムを造る技術はアメリカのイーストマンコダック社とドイツのアグファ社の2社だけであった。カラー技術は1946年当時、日本にもなかったそうだ。とすると推測するに、世界に先駆けカラー映画を製作する技術はソ連独自のものではなく第二次大戦でいち早くドイツに侵攻したソ連軍の戦利品の一つではないか、あるいは東ドイツを占拠しドイツの優れた技術を吸収していたのかと思われるがこの推測が間違っているのか、的を射ているのか調べてみたがよく判らなかった。

映画石の花は幻想的で息をのむほど美しい画面であったことだけが頭に残りストーリーはすっかり忘れてしまったが、ソ連というと石の花が思い出されるのである。